

小学生の美術館体験—追跡アンケートをとおして見えてくるもの

貝塚健
細矢芳

1. はじめに

石橋財団ブリヂストン美術館は、毎年約40校の小学校を受け入れて、スクールプログラムを実施してきた。過去の来館実績はほぼ東京都内に限られるのだが、その学校所在地は、東は江戸川区、南は大田区、西は国立市、北は豊島区といった広範囲にわたる。ブリヂストン美術館が、JR（中央線、山手線、京浜東北線）、東京メトロ（銀座線、東西線）、都営地下鉄（浅草線）など、いくつもの鉄道路線を利用できる好立地にあることの証左だろう。小学生が乗り換えなしの一路線のみでやってこられる地域が広いのである。

スクールプログラムは、電話や電子メールなどによる申込み受付から開始される。そのほとんどは図画工作科の専科教諭からの連絡である。一度来ていただいて、子どもたちが鑑賞することになる展示をご覧いただきながら、図工教諭との打合せを行い、美術館や鑑賞教育に対する考え方やプログラム内容への希望、また子どもたちの授業などでの様子をうかがう。それらをもとに学芸員とインターンによって、見学当日のプログラム内容が組み立てられる。通常、2～8人の受け入れチームを組むことになる。当日は、まず130席ある1階ホールでオリエンテーションを行い、2階の展示室にあがって5～25人のグループごとにギャラリートークを実施し、その後、自由見学とし、最後に再びホールにもどってまとめの話を聞いてもらう、といったプログラムが典型的なものである。そのタイムテーブルとギャラリートークで取り上げた作品、子どもたちの所見、受け入れスタッフの反省点などはすぐにA4判1枚の記録にまとめられ、スタッフ間で共有され翌年の見学のための資料として蓄積されていく。また、ときには数カ月後に今度は学芸員がその小学校におもむき、教室で出前授業を行うこともある。ブリヂストン美術館ではそうした出前授業を「アウトリーチ」と呼んでいる。

しかし、これまで小学生の美術館訪問体験を個別に精査することはほとんど行ってこなかった。子どもたちの美術館体験とはどんなものか、すなわち子どもたちは美術館で何を見て、何を聴き、何を感じ、何を記憶に留めるのか、それまでのどんな知識や体験と展示作品が結びつけられるのか、といったテーマで分析をしたことがなかっ

た。学芸員やインターンは、プログラムのなかで子どもたちから直接さまざまな情報や示唆を受け取る。それらは個人的な蓄積となって、その後のブリヂストン美術館の活動に資するものになるのだが、総体としての子どもの美術館体験をとらえる試みを怠ってきたといえるだろう。

たまたま、ブリヂストン美術館は2000年に3校の小学6年生を対象にして、来館から約6カ月後に追跡アンケートを行ったことがある。その自由記述式のアンケートはたいへん興味深い事実を教えてくれる。本稿では、そのうち桐朋学園小学校を対象にしたアンケートを集計し、読み解き、分析することで、子どもたちの美術館体験を考察してみたい。

2. 仮説

ここで稿者たちのこれまでのスクールプログラムやアウトリーチの経験や知見から、子どもたちの美術館体験について、以下のような3つの仮説を立ててみたい。

仮説1：子どもの美術館体験は、訪問予定が決まったことを知ったときから始まり、実際の美術館訪問を経たのちも、記憶が薄れていきながら半永久的に続く旅のようなものである。

仮説2：子どもにとって自身の作品制作と美術作家の制作活動は、断絶したものではなく、一連の人間の表現活動として認知される。

仮説3：図工科教諭の日常の学習指導が、子どもの美術館体験に影響を与える。その逆に、美術館体験もその後の図工科の学習に影響を与える。そのことに、学校と美術館の協働・連携の意義を見出せる。

これらは、美術館で子どもを対象にした活動を実践している教育普及担当学芸員にとっては、あるいは美術館関係者にとっては自明のことかも知れない。あえてアンケートなどを分析して結論づける必要もないのかも知れないのだが、できるだけ客観的に子どもたちの記述をもとにしてこれらを確認することをめざしてみたい。サンプルは1小学校の74人のみであるが、後述するように、こ

の桐朋学園小学校は多くの分析材料をわれわれにもたらしけている。今回の分析の目的は、多量のデータによって平均値を導き出すことではない。実際に起こっている子どもの美術館体験の一つの典型像を描き出すことにある。

3. 桐朋学園小学校のブリヂストン美術館訪問： 2000年6月15日

桐朋学園小学校は東京都国立市にある男女共学の私立小学校である。開設は1959年。武蔵野の緑豊かな広大な敷地のなかで、校舎は雑木林に囲まれている。都内の公立校と同様に専科教諭が図画工作科を教え、毎年6年生全員がブリヂストン美術館を訪れるようになったのは1998年からである。同校では試行錯誤の結果、5年生の5月に目黒区駒場にある日本民芸館を、6年生の6月にブリヂストン美術館を訪れることを、恒例行事に位置づけるようになった。作文教育に力を入れていて、美術館訪問の翌週には全員が400～800字の感想文を書き、7月の夏休み前に「感想文集」として冊子にまとめて配布される。記憶が新鮮な訪問直後の感想文は、われわれに生き生きとした有益な情報を与えてくれる。

この桐朋学園小学校6年生73人（1人が欠席）が2000年にブリヂストン美術館を訪れたのは、6月15日（木）のことである。ブリヂストン美術館では第3室から第10室までのコレクション展示のほか、第1室でコーナー展示「レンブラントからアングルまで」、第2室でコーナー展示「巨匠たちの素顔—水彩・素描の魅力」が開催され、コレクションを代表する作品が並んでいた。迎えたのは、学芸員の貝塚健、坂本恭子、インターンの磯谷麗子、荻田麻子、草壁美和子、関根緑、妹尾知子、高田瑠美、吉田奈加の9人である。事前打ち合わせは、図工科のS教諭と5月に行われた。その結果を踏まえて、組み立てられたプログラムとタイムテーブルは以下のとおりである。

11:30 学校出発（3時間目終了後、昼食を済ませておく）。

持ち物：リュックサック、スケッチブック、鉛筆、お土産代500円、帰路の交通費、水筒、時計

引率者：S教諭（図工科）、O教諭（学級担任）、T教諭（学級担任）、T小学校部長

11:54 JR国立駅で中央線東京行きに乗車。

12:45 JR東京駅に到着。八重洲中央口から出て地

下道を歩く。

13:00 ブリヂストン美術館に到着。

13:05-13:30 1階ホールでオリエンテーション。

- 1) 挨拶・スタッフ紹介
- 2) 施設とスケジュールの説明
- 3) 作品と美術館を大切にすること（注意にかえて）

4) 絵を見る練習をしよう

○今朝、起きてからのことを順番に思い出してみよう

○この一年間で見たいちばんきれいな景色を思い出してみよう

13:30-14:00 2階展示室に上がり自由見学

14:00-15:15 ギャラリートーク、質疑応答。その後、スケッチ、お土産購入

Aグループ 3室：吉田＝ギリシア陶器

7室：関根＝マティス《青い胴着の女》

Bグループ 4室：高田＝ブーダン《トルヴェイル近郊の浜》

5室：草壁＝モネ作品

Cグループ 8室：坂本＝クレア《鳥》

8室：荻田＝フォトリエ《旋回する線》

Dグループ 9室：磯谷＝黒田、藤島、青木作品

9室：貝塚＝黒田《プレハの少女》

※各グループは予定の場所で待機し、子どもたちがある程度集まったところで随時ギャラリートークをし、もう一人はサポートにまわる。

15:15-15:20 ホールでまとめ

○今後、5回ブリヂストン美術館にきてほしい（中学生、高校生、大学生、社会人になったら、子どもができたらいっしょに）

15:45頃 JR東京駅で乗車。各自の最寄り駅で下車して流れ解散、帰宅。

館内に2時間15分滞在するタイムテーブルを組んでもらえることは、受け入れ側にとってたいへんありがたい。ていねいに対応ができるのである。

30分間の自由見学の後、持ち場に待機したスタッフが、子どもたちが集まる様子を見極めて、随時短いギャラリートークを行った。なかには7回のギャラリートークを聞いた子どももいれば、ほとんど体験しなかった子どももいる。スタッフに積極的に質問した子どももいて、スタッフは想定

外の作品について解説したケースも多かった。合間を縫って、ほとんどの子どもたちは色鉛筆によって気に入った作品のスケッチを行った。また、まとめの時間の前に多くはミュージアムショップで決められた総額500円以内の買い物をした。そのほとんどは気に入った作品の絵ハガキである。

4. 感想文集

ブリヂストン美術館訪問の4日後の6月19日(月)、子どもたちは400から800字の感想文をS教諭に提出した。前述のように、生き生きとした書きぶりは、稿者たちにさまざまなことを教えてくれる。当然のことながら、またある意味では不思議なことかも知れないのだが、美術館訪問の主たるテーマが作品鑑賞にあることを十分に理解している。狭義の鑑賞から外れてしまう細部——例えば、だれといっしょに展示室をめぐったか、梅雨の蒸し暑さから館内に入ると心地よく涼しかったこと、展示室にところどころ温度計が置かれていたこと、行ききの電車のなかで友人たちとおしゃべりを楽しんだこと、など——が書かれることもあるが、ほとんどの感想文では美術作品そのものに意識が向かい、またそれらとの出会いを忠実になぞっている。

具体的な作品名が、74人の感想文のなかに、62個登場する。以下は、そのなかで多かったものをその順に並べたものである。

言及された作品

1. ロダン《考える人》	27人
2. クールベ《雪の中を駆ける鹿》	16人
3. モネ《睡蓮》	15人
4. シニャック《コンカルノー港》	11人
4. モネ《睡蓮の池》	11人
6. モネ《黄昏、ヴェネツィア》	8人
6. ゴッホ《モンマルトルの風車》	8人
8. ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》	7人
8. クレー《鳥》	7人
8. 藤田嗣治《猫のいる静物》	7人
11. 岡鹿之助《雪の発電所》	6人
12. エジプト《アマビス神礼拝図》	5人
12. コロー《ヴィル・ダヴレー》	5人
12. ギリシア《獅子頭部》	5人
15. ピカソ《生木と枯木のある風景》	4人
15. 藤島武二《ローマの遺跡》	4人
15. デュフィ《オーケストラ》	4人
18. 藤島武二《屋島よりの遠望》	3人

18. マティス《青い胴着の女》	3人
18. ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》	3人
18. キリコ《吟遊詩人》	3人
18. アーキペンコ《ゴンドラの船頭》	3人
18. ジャコメッティ《ディエゴの肖像》	3人
18. フォートリエ《旋回する線》	3人

圧倒的に言及が多いのがオーギュスト・ロダン《考える人》である。世界中によく知られた美術史を代表するアイコンであるのはいうまでもないが、それにもまして、2000年当時、英会話教室のテレビコマーシャルに使われていたことが大きく作用している。そのCMのことや実際の作品を見られたことを喜び記述、予想外に小ぶりなこと(ブリヂストン美術館の《考える人》はもっとも小さいバージョンである)などが記される。

また、S教諭が毎年3年生に対して、ビデオ「リネアーモネの庭で」(スウェーデンの少女リネアがモネ作品に憧れて、パリを訪れて美術館で作品を鑑賞し、最後にジヴェルニーのモネの庭に旅するまでの物語。1985年に刊行されたクリスティーナ・ビョルクによる絵本のビデオ化)を見せているため、クロード・モネの睡蓮を描いた実作品をブリヂストン美術館で見られることを聞き、予め大きな期待をしている子どもたちも多い。モネへの選好は、《睡蓮》や《睡蓮の池》から、《黄昏、ヴェネツィア》へと広がっている。モネは水をよく描いた画家だという指摘は、事前に得ていた知識を、海景画《雨のベリール》などとあわせて展示作品で確認したものだろう。

一方でまったく予備知識がないまま、ギャラリートークによって関心が喚起されたと思われる作品も目につく。アンリ・マティス《青い胴着の女》、パウル・クレー《鳥》、ジャン・フォートリエ《旋回する線》などである。見過ごされてしまいそうな作品の魅力や制作プロセスが、スタッフのギャラリートークや個別の質疑応答によって示され、それに共感を覚えたことを出発点にして感想文の記述が展開されていく。たとえばこんな記述がある。

この絵(フォートリエ《旋回する線》)を見ると、作者がどんな気持ちで描いたのか、いろいろ考えられる。そう思って考えると、かすかに笑ってくる。おもしろい。どこの位置から見ても、この絵は複雑という言葉にあふれている。雑だ雑だとはばかり言っているが、雑だけでなく、何と言っているのかかわからないのだが、

個性に満ちていて私は目に入ってしまったのだ。どうにもこうにも、この絵の良さをどう言葉に表していいか考えてしまう。うまく伝えられないが、けどいいのだ。(M.K.)

表現技法への関心も強い。ポール・シニャック《コンカルノー港》が示す典型的な新印象主義の点描は、初めて見る子どもたちの心を強く惹きつける。「まるで紙をちぎって貼るような独特の筆使い」、「こんなに手間がかかる絵」、「タイルを一枚一枚貼り付けているような」などの記述が頻出する。岡鹿之助《雪の発電所》が気に入った作品にあげられているのも、そのマチエールに、他の画家に見られない特異性を見つけ出したからだろう。

さらに、自身の制作とつなげて作品と接する態度もしばしば見受けられる。典型的なものは以下である。

ぼくは今、図工で、こころの泉(校内にある池)を描いている。水を描くということで共通するモネの「睡蓮の池」では、すき通った池を生き生きと描いている。ぼくは、その水の描き方を食い入るようにつめた。なんとかこの描き方を生かして、自分流の水の描き方ができないだろうか？ 風が吹くと少し波が立って落ち葉がプカプカゆれる。そんな様子が少しでも上手に描けるように「睡蓮の池」の絵はがきを買ってきた。じーっと見ていると、なんだか池のイメージがわいてくる。「Nのこころの泉」頑張ってみよう。(N.T.)

読むものの心をしっかりと捉える文章である。留意したいのは、モネをただ単に仰ぎ見るべき歴史上の偉大な画家として自分から切り離すのではなく、自分と同じ絵画制作者として地続きのものともみなす視点である。いわば同格の存在とみなし、それでもなお学ぶ対象であることを謙虚に認識しながら、作品の表現を見つめている。さらに、モネに学びながら「自分流の水の描き方」を模索しようとしている姿はわれわれの心を打つ。

作品との出会いは、自分自身の言葉を紡ぎ出すきっかけともなるようだ。以下は感想文のほとんどを、シャルル=フランソワ・ドービニー作品の叙述に費やしている。

どんよりとしているが、どこか明るく見える空、グラデーションのラインと力強さが美しい海、その海にはどこかさみしげな感じがある。

そしてきわめつけは黒っぽく白っぽい、けれども灰色ではない、美しい色の砂浜、私はこの絵を初めて見たときすいこまれそうになった。そしてほうぜんと、大きく力強い油絵の前で立ちすくむ事しか出来なかった。

この絵を描いた人は、シャルル=フランソワ・ドービニーさんだ。そして私をとりこにしたこの絵の題は、「レ・サーブル=ドロヌ」である。1870年から1878年のうちで、この絵を描き上げたそうだ。

私がこの絵を気に入った理由は、4つほどある。1つ目は、色合いが良く、空、海、砂浜の形、色が見事にとけあっている事。2つ目は、筆使いが美しく、細い線や、太い線、海のうねりもきれいに描かれている事。3つ目は、力強い事だ。なんだかこの絵具一ぬり一ぬりにパワーを感じる。4つ目は、口では上手く言えないが、海なら海の気持ち、空なら空の気持ちに、砂浜なら砂浜の気持ちを絵で表している所だ。自分の伝えたい事を絵で表せるなんて、私はすごいと思う。

その後も、いろいろ美しい作品と出会ったが、「レ・サーブル=ドロヌ」が目には焼きついてはなれなかった。(H.M.)

6年生とは思えない関連な文章である。海や空、砂浜の擬人化が見られ、それはとりもなおさず作品の擬人化につながっている。この児童はあきらかにドービニー作品と対話を交わしている。ドービニーの魅力を自分なりに分析し、整理して自分の言葉で文章化しているのも特徴的である。

こうした感想文のなかでわずかだが見られるのが、美術館訪問によって、美術館像の転換が引き起こされている例である。典型的なものは以下だろう。

私は、前まであまり美術館ってカチカチしたふんいきで好きじゃありませんでした。でも、今日みたいに、気に入った絵を見つけ、その絵についていろいろ考えてみると、美術館って楽しい所だな、と思えるようになり、好きになりました。(I.K.)

否定的だった美術館イメージが、実際の体験によって好転している。稿者たちにとってはたいへんありがたい事実である。美術館が「カチカチした雰囲気」だという要因を、美術館関係者ならば追求しなければならぬところだが、いまのところは、そうした美術館イメージが小学生にも共有

されている現実をおさえておくだけにしよう。一定の条件（容量を超えない適度な人数と十分な時間）が与えられれば、子どもたちの美術館体験を楽しいものにするスキルを、われわれは経験の蓄積によって具えている。ネガティブな美術館イメージを突き崩す機会を、どうにかして増やすことがわれわれの課題だろう。

5. 6か月後の追跡アンケート

6月15日のブリヂストン美術館訪問から6か月後の2000年12月、稿者たちがS教諭に依頼し、子ども一人ひとりに自由記述式アンケートが教室で行われた。ブリヂストン美術館から提示された文面は以下のとおりである。

みなさん、こんにちは。ブリヂストン美術館の貝塚です。

みなさんにブリヂストン美術館を訪問していただいてからしばらく経ちましたが、みなさんとお会いしていろいろなお話をしたり、質問を受けたことは、私たちにはとても楽しい思い出です。そこで、みなさんにとってあの日のことがどんな思い出になっているのかも聞いてみたくなりました。下にあるいくつかの質問に答えていただけたらとてもうれしく思います。

これは、学校のテストではありません。だから、どんなことを書いてもいいし、また何も書かなくても大丈夫です。出来るかぎり自分の心の中にあることをそのままに、文でも、言葉でもかまいませんから書いてみてください。よろしくお願いします。

1. ブリヂストン美術館に行くことを先生から初めて聞いたとき、どんな気持ちになりましたか。また、出かける日の朝や、ブリヂストン美術館に着く途中はどんな気持ちでしたか。
2. ブリヂストン美術館の中で見たもので、何を、どんなものを覚えていますか。覚えているものをできるだけたくさん上げてみてください。

3. ブリヂストン美術館の中にあったもので、とても好きになったものがありましたか。それはどういうところが気に入ったのですか。

4. 展示室やホールで私たちがみなさんに話したことで、どんなことを覚えていますか。また、絵を前にしてみんなで話したときのことでどんなことを覚えていますか。

5. 家に帰ってから、その日の出来事について家族にどんな話をしましたか。

6. その後、ほかの美術館に行ってみましたか。行ってみた人は、ブリヂストン美術館とどんな違いを感じましたか。

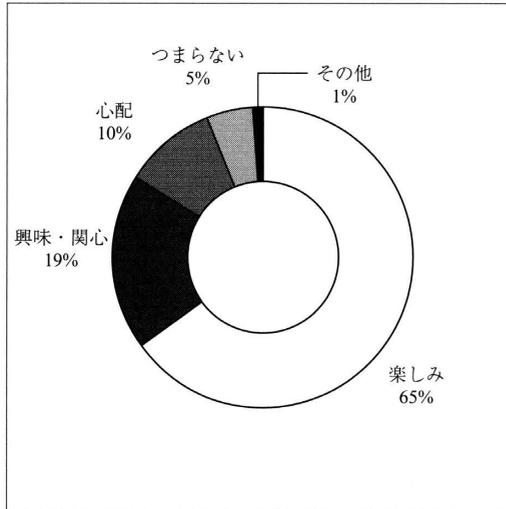
7. ブリヂストン美術館で昔の人たちの絵や彫刻を見たことによって、図工の時間で作品制作への取り組み方が変わりましたか。それはどんなふうになりましたか。

8. またブリヂストン美術館に行ってみたいと思いますか。

以上で質問は終わりです。答えてくれてどうもありがとうございます。最後に下欄にお名前を書いてください。

訪問から半年という時点で、美術館体験がどのようなものに変化しているのか、あるいは変化していないのかを知りたいと思ったことが、そもそものこの調査のきっかけである。上記の質問への自由記述回答を、キーワードを抽出して集計することを試みた。これらは、さまざまな表現を内容ごとに集計したために稿者たちの独断による解釈が含まれていることを予め断っておきたい。その設問と、記述の分析結果は以下の通りである。

質問1：ブリヂストン美術館に行くことを先生から初めて聞いたとき、どんな気持ちになりましたか。また、出かける日の朝やブリヂストン美術館に着く途中はどんな気持ちでしたか。



この問いに関する記述を、キーワードごとに「楽しみ」「興味・関心」「心配」「つまらない」「その他」というカテゴリに分けて集計してみると、上記のような結果となった。それぞれのカテゴリにおける主な記述は、以下である。

○楽しみ

主な記述	計
わくわく・どきどき。	26
どんな作品が見られるか。	21
遠足気分、授業がさぼれる。	4
初めて行くところだから。	4
モネを見ること。	4
絵を描くことや見るのが好き。	3
待ち遠しい。	3
お土産。	2
ゴッホを見ること。	1
シニャックを見ること。	1
《考える人》を見ること。	1

○興味・関心

主な記述	計
どんな所だろう？	7
どんな作品があるのだろうか？	7
どのくらい大きいのだろうか？	1
見てみたい。	1
タイヤを展覧しているの？	1
知っている絵はあるかな？	1

○心配

主な記述	計
絵を見て、楽しめるだろうか？	4
遠いなあ。	3
スケッチが苦手。	1
固い雰囲気かな？	1

○つまらない

主な記述	計
興味がなかった。	2
つまらなそう。	2

○その他

主な記述	計
記入なし(当日欠席、別の日に家族と来館)	1

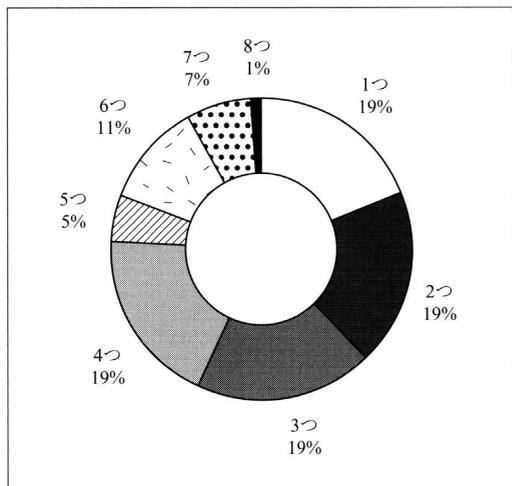
S教諭からブリヂストン美術館訪問予定を知らされたときの感情が、6か月を経ても鮮やかに記憶されている。もとより、通常の授業を中断して校外へ出かけること自体が、心躍らせるものであることはいうまでもない。それでもなお、美術館に対する純粋な期待感の大きさが見て取れるだろう。84%の子どもが前向きな感情を持ったことを記憶している。

感想文集、アンケートをとおして見ても、6月15日以前にブリヂストン美術館に来たことのある子どもはいなかった。大きく影響を与えているのは、おそらく一年前の日本民芸館体験だろう。同館でも学芸員のギャラリートークを聴き、展示作品のスケッチを行っている。推定するに、相当に楽しく豊かなものであったことと思われる。因らざるも、同館とブリヂストン美術館が連携を果たしているともいえる。

いずれにしても、訪問前の感情の記憶の強さは、予想以上のものであった。

質問2：ブリヂストン美術館の中で見たもので、何を、どんなものを覚えていますか。覚えているものをできるだけたくさん上げてみてください。

この質問は、作品以外の美術館の要素で記憶に残るものがないかどうかを調べるために設定されたものであった。



覚えているものとして、1つから8つの回答があり、総回答数286。平均すると3.86の言葉が上げられている。意外なことに、ほとんどすべてが美術作品であった。作品以外のただ一つの回答は「日本人の絵が飾られている部屋の雰囲気」というものである。当時、この第9室と第10室は展示壁面が赤く塗られていたことを反映していると想像される。しかし、これも作品に近接した要素をあげたものである。美術館界では、ショップやカフェ、ホール、情報コーナーなど付帯設備拡充の必要性を叫ばれて久しいが、美術館は第一義的に作品を見せる場であることを如実に感じさせてくれる回答結果であった。

当然であるが、あげられた記憶に残っている美術作品は、次の質問3の回答と大きく重なっている。

質問3：ブリヂストン美術館の中にあつたもので、とても好きになったものがありましたか。

総回答数87。平均すると1.17の言葉が上げられている。この質問も作品以外のものがあがる可能性も想定していたが、ひとつだけ「置いてあつた椅子」という回答があつただけで、他はすべて展示作品であつた。これらの答えを作品名が特定できるものと、その他のキーワードに分けて集計してみると下記ようになった。

○作品名が特定できるもの

作家	作品名	計
クールベ	雪の中を駆ける鹿	10
ロダン	考える人	8
シニャック	コンカルノー港	6

クレー	島	5
デュフィ	オーケストラ	3
ルノワール	すわるジョルジュ・ジャコブ・シャルパンティエ嬢	3
藤田嗣治	猫のいる静物	3
エジプト	アヌビス神札拝図	2
コロー	ヴィル・ダヴレー	2
ドガ	レオポール・ルヴェールの肖像	2
モネ	黄昏、ヴェネツィア	2
マティス	青い胴着の女	2
アーキベンコ	ゴンドラの船頭	1
コロー	オンフルールのトゥータン農場	1
モネ	雨のベリール	1
キリコ	吟遊詩人	1
ピカソ	生木と枯木のある風景	1
ギリシア	獅子頭部	1
エジプト	聖猫	1
ブランクーシ	接吻	1
岡鹿之助	雪の発電所	1
デュビュッフェ	暴動	1

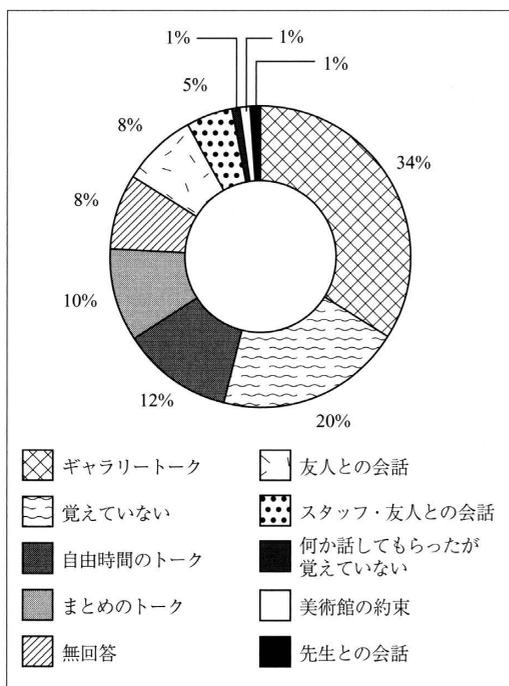
○その他

主な記述	計
モネの《睡蓮》。	11
シニャックの2つの絵。	1
ちっちゃいけどお城みたいな絵。	1
モネのしおり（睡蓮）を買った。	1
モネの絵。	1
ゆったりした森の絵。	1
絵具の色づかい。	1
古代文字。	1
女の人の絵。	1
水平線に太陽が映っている絵、海。	1
昔の猫の置物。	1
置いてあつた椅子。	1
藤島武二さんの絵。	1
とてもきれいで本物のよう。	1
黒っぽい海に白い砂浜、色づかいが美しかった。	1

具体的な作品名を比べると、オーギュスト・ロダン《考える人》についての言及がやや減ったことをのぞけば、感想文集での集計とほぼ同じである。印象的なのは、6か月が経過しても、作品名あるいは作品画面をよく記憶していることである。

もちろん、感想文を書くことで、一度、体験を言語化していることが大きく作用しているはずである。美術館体験後にそれを教室で作文にまとめることを否定的にとらえる図工科教諭もいることをわれわれは承知している。しかし、言語化することによって、自分の体験を客観視し、記憶を鮮明化することは確かだろう。

質問4：展示室やホールで私たちがみなさんに話したことで、どんなことを覚えていますか。また、絵を前にしてみんなで話したときのことでどんなことを覚えていますか。

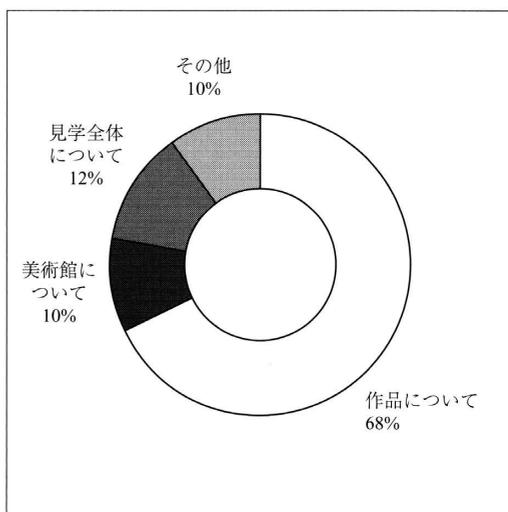


ギャラリートーク（34%）に続いて多いものに、自由時間のトーク（12%）があるが、これらは、主に子どもたちから美術館スタッフへの質問から始まる話のことである。主な内容として、1) ルノワール、《考える人》、ピカソ、ロダン、藤島武二について、2) 温湿度計について、3) 彫刻の作り方について、4) 免震装置について、などである。まとめのトーク（10%）とは、展示室での見学を終えてからのクローズングトークのことで、ここでは、美術館からのお願として、「あと最低5回ブリヂストン美術館に来てください。中学生になったら1回、高校生になったら1回、大学生になったら1回、社会人になって働き始めたら1回、そして結婚して子どもが生まれたらその子どもを連れ

て家族で1回」といった具体例をもとに、同じ作品であっても、見るものが成長し変化すると、同じ作品を見ても異なる感じ方や発見があることを伝えている。

ディテールは次第に記憶を薄れさせているが、かなり多くの子どもたちが、言語化できる体験の記憶を維持させているのが分かった。

質問5：家に帰ってから、その日の出来事について家族にどんな話をしましたか。



この問いに関する記述を、キーワードごとに「作品について」「美術館について」「見学全体について」「その他」というカテゴリに分けて集計してみると、上記のような結果となった。それぞれのカテゴリにおける主な記述は、以下である。

○作品について

主な記述	計
ポストカードを見せて絵の話。	8
モネの絵。	8
いろんな良い絵があった。	6
《考える人》。	6
気に入った絵のこと。	5
おもしろい絵があった。	4
いろんな絵があった。	3
スケッチをみせた。	3
有名な人の作品があった。	3
いろんな絵のこと。	2
すごかった絵について。	2
どんな絵があったか。	2

アヌビス神。	1
いろんな彫刻があった。	1
エジプトのレリーフ断片。	1
さみしそうな顔のおじさんの絵。	1
すごくうまい絵がたくさんあった。	1
すごく良い絵があった。	1
とてもうまかった。	1
ヘラクレス。	1
絵の説明をした。	1
絵の話。	1
絵を見て感じたこと。	1
牛と女の人しかいない絵。	1
軽井沢の林みたいな絵があった。	1
古代文字。	1
《考える人》が小さかった。	1
高価な絵があった。	1
知っている絵があった。	1
彫刻の話。	1
藤島さんの絵。	1
迫力のある絵や彫刻があった。	1
描き方の話。	1
有名じゃない絵にも気に入ったものがあった。	1
有名な絵について、どんなものだったか。	1

○美術館について

主な記述	計
きれいだった。	5
かなり広がった。	1
でっかい建物だった。	1
広がった。	1
高級感があった。	1
天井が高い。	1
美術館のデザイン作りについて父(建築家)と。	1

○見学全体について

主な記述	計
いろんな話をしてくれた。	3
楽しかった。	3
つまらなかった。	1
とてもおもしろいところだった。	1
とても良かった。	1
モネの話をしてくれた。	1
ルノワールのお話を聞いておもしろかった。	1
考える人の話をしてもらった。	1
電車の行き帰りが楽しかった。	1

○その他

主な記述	計
あったことをあらいざらい。	1
あと5回くらい来たほうが良いこと。	1
お土産をあげた。	1
ポストカードを買った。	1
モネの庭に行ってみたい。	1
リネアの気持ちがあった。	1
家族にとっても良いところ。	1
貝塚さんのこと。	1
今度は家族と行きたい。	1
入館料が高い。	1
美術館の人の話。	1

この質問も、美術館体験の複雑さを推し量るためのものである。予想していた以上に、訪問後に家族に対し体験についてさまざまなことを話していること、またその記憶が6か月後も克明であることが分かった。家族に向かってあらためて言語化することで、美術館体験が重層化し、一方で子どもの内部で整理されていくことが推定される。保護者にとっては、子どものさまざまな側面を知る絶好の機会ともなる。この調査後、稿者たちは、子どもたちの見学後のクロージングトークで、「今日、家に帰ったら、お母さんやお父さんに、必ず美術館で見たことを話してください」とコメントするようにしている。

その話した内容は、「展示作品について」が68%と圧倒的に多い。ここでも同様に、美術館体験の中心的テーマが作品との出会いであることを強く意識していることが分かる。

質問6：その後、ほかの美術館に行ってみましたか。行ってみた人は、ブリヂストン美術館とどんな違いを感じましたか。

○訪れた美術館

主な記述	計
影絵美術館	13
世界四大文明展	2
ピカソ展	1
上野	1
記入なし	12

この問いには、29名(39%)が別の美術館を訪れたと回答しており、その内訳は、上記である。このうち、13人が回答している「影絵美術館」とは、

修学旅行で秋に6年生全員が訪れた軽井沢にある美術館である。訪れた美術館の名前を記入していない回答の中にも、影絵美術館をイメージしている回答が少なくないと思われる。

他館と比べた時のブリヂストン美術館についての主な記述を以下にまとめる。

○ブリヂストン美術館について

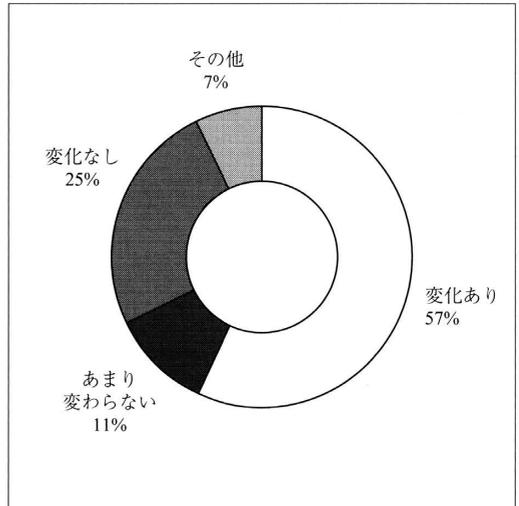
主な記述
雰囲気がぜんぜんちがった。
ブリヂストン美術館は二十面相の部屋っていう感じがした。
ブリヂストン美術館はゆっくり一つ一つ見られる感じだった。
ブリヂストン美術館はみんなに説明してくれる部屋があった。
ブリヂストン美術館はみんなに絵のことを説明してくれる。
ブリヂストン美術館は雰囲氣的にリッチだった。
ブリヂストン美術館は広くてゆっくりできてすごい物がざらざらあった。
ブリヂストン美術館はなんだかゆったりできる。
ブリヂストン美術館はとても落ち着いた
ブリヂストン美術館は特ちょう的な絵が多かった。
ブリヂストン美術館はすごかった。
ブリヂストン美術館は静かで幻想的な空間だった。
ブリヂストン美術館はくつろげる。きれい。設備がいい。
ブリヂストン美術館はきれい。
ブリヂストン美術館は大人っぽかった。
ブリヂストン美術館は絵がいっぱいあり良かった。
ブリヂストン美術館はいろんな物があり、見ごたえがあった。
ブリヂストン美術館はいろいろな人の絵があってよかった。
ブリヂストン美術館は色々な絵があって広がった。
ブリヂストン美術館はいろいろ調べられる。
ブリヂストン美術館は、いろいろな絵が置いてあり、さまざまなジャンルがある。
どっちも違う良いところがあった。
どちらにも独特のところがあった。
上野にはでっかい考える人があった。

多くのスクールプログラムを通じた稿者たちの経験では、小学生段階では美術館を訪れてもふつ

う、美術館名や展覧会名を正確に記憶することはほとんどない。同校の児童の場合も同様だろう。そのなかで、ブリヂストン美術館訪問だけは特別な体験だったといえる。学芸員らによるギャラリートーク、十分な時間を確保したプログラムの実施が、そうした事態をうみだしたのだろう。

記述されたブリヂストン美術館との違いは、具体的なブリヂストン美術館イメージを伝える。「ゆっくり一つ一つ見られる」、「ゆったり」、「くつろげる」、「落ち着ける」、「いろいろな絵がある」などは、ブリヂストン美術館の特色を感じ取っていることを示している。

質問7：ブリヂストン美術館で昔の人たちの絵や彫刻を見たことによって、図工の時間で作品制作への取り組み方が変わりましたか。それはどんなふうになりましたか。



それぞれのカテゴリにおける主な記述は下記のとおり。

○変化あり

主な記述
私もあんなすてきな物がつくりたいと思って、時間をかけていてねいにつくった。
より本物に近い作品にしてみたいと思うようになった。
もっとやる気が出ました。作品を作る気持ちがパワーアップした感じです。
もっと上の方を目指すようになった。

昔の絵の描き方の工夫などをまねしてみても、絵を描いてみたりした。そうしたら、絵がうまく描くことができた。
見てから、ていねいに失敗をしないように。
まねして、そういう風に描いてみたいな~と思った。
まえよりは、きれいに本物っぽく描けたと思う。
本物の細かい所まで見て描くようになった。
ブリヂストン美術館にかざってある絵や彫刻などのように、カッコヨクって力強い作品が作りたかった。
風景の書き方をまねしてみた。(木とか)
はい。どんなところといわれても~。
なんとなく、いろんなことを思いうかべるようになった。
なんかそのまま描くよりちょっとちがって自分風を書くようになった。
なるべくうまく……。
ていねいに色合いなどを考えるようになりました。
タッチの仕方をていねいにやさしくするよう心がけました。
少し変わりました。作品をつくるときに、アイデアがすぐでるようになったりした。
少し、前よりも細かい作業が好きになった。
図工ではないけれど、絵の「おくゆき」を少し考えながら描くようになりました。
図工がおもしろくなった。
自分の個性をだした作品にしたてようとするようになった。
自分が満足するような作品をつくるようになった。
作品を見た後には、もっとうまく絵が描けていたら、もっと変わったかもしれない。
作品をつくる時、ブリヂストン美術館でみた絵を思い出すようになった。
細かい所にも取り組むようになった。
きれいにやって、立体感を出そうと思った。
変わった。明るい色、暗い色がたくさん使えるようになった。
描きかたなどを工夫した。
絵を描くときや、箱をつくる時など、なんか立体感をだすようにがんばるようになった。
絵を描く時は、真ん中にドンと大きく絵を描くようにしました。そして、色も、印象に残るように濃く描きたいと思っていました。
絵を描くとき、モネの絵を思い出して、ちょっとはうまくしよーかな? と思った。
絵とかを同じ木でも、部分によって色を変えたりする。
いろんなことにこだわるようになった。

いろんな絵を調べて描くようになった。
いろんな案などが考えられるようになった。
今までは「どうせ、このままこの作品なんて残らないんだから! がんばらなくてもいい」という思いがあったけど「残らないかもしれないけど、一生けん命やろう」と思うようになった。
今まではあまりていねいに作らなかったけど、ブリヂストン美術館に行って作品をていねいに作ることにした。
一生けん命心をこめて? 行うようになった。
いい物がつくれるようにとか、その人の個性があるんだから、へたでもいいとか思うようになった。

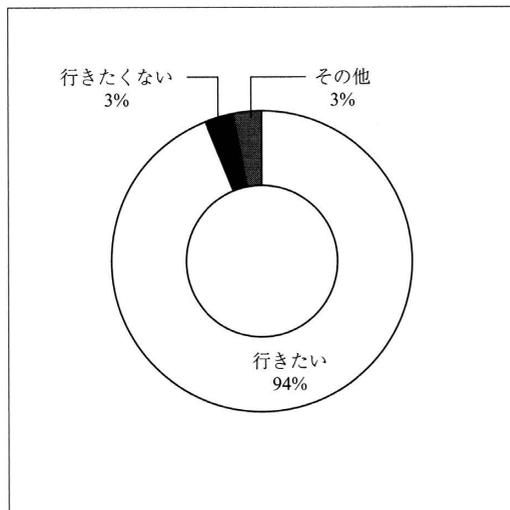
○あまり変わらない

主な記述
あんまり変化なし。
とくに変わったことはないけど、あんなふうには描けたらいいなとかって思う。
あんまり変わらないけど、いい作品にしたいと思う。
あまり変わりなく、でもいろいろな作品を参考にしながら作品を作っている。
あんまり変わらなかったけど、少し絵の感じをまねしてみたりした。
あんまり変わらないけど、いい作品を見て、ほかの作品もあんな風になるといいな~と思う。

この質問は、本アンケートの核心ともいえる。半数以上、57%の子もたちが作品制作への取り組みが「変わった」と回答している。これは稿者たちの予想以上に高い割合であった。

さまざまな記述が登場するが、頻出する重要なキーワードは「ていねいに(一生懸命に; 細かいところに留意して)」と「自分らしさ(個性)」である。これらはおそらくS教諭が図工科の授業で子どもたちを指導する際に使っていた言葉だと推定できる。子どもたちは、授業で日頃耳にしている示唆を、美術館で展示作品をみながら反芻するのだろう。あるいは、指導者の言葉の意味を、作品を見ることによって自分なりに理解するのだろう。ここに、学校と美術館が協働する意味が存在する。美術館で美術作品を鑑賞することが、学校での造形の表現にそのままつながっている。子どもたちのよりよい表現を追求するために、美術館での鑑賞は有効だといってよい。

質問8：またブリヂストン美術館に行ってみたいと思いますか。



それぞれのカテゴリにおける主な記述は以下のとおり。

○行きたい

主な記述	計
また行ってみたい。	37
もっとじっくり見たい。	3
中学生でまた行きたい。	3
また行ってみたい。でも東京駅なので行くのが大変。	2
もう一回見たい。	2
家族と一緒に行ってみたい。	2
絶対また行きたい。	2
20歳くらいになったらもう一回行ってみたい。	1
いつか行ってみたい。	1
ちょっと暗くて怖い部屋があったけど、また行きたい。	1
はい、また行ってみたいです。	1
まあまあ行きたい。	1
またいろんな絵を見たり、お話を聞いたりしたい。	1
また行ってみたい。どう変わっているのかみたい。	1
また話を聞かせてください。	1
近くに行くことがあったら、その帰りにでも。	1
行ってじっくり見たい。	1

今度は違うところに注目したい。	1
今度は詳しく絵のことを聞きたい。	1
時間があれば行ってみたい。	1
次行くのを楽しみにしています。	1
大人になったらもう一回、おじいさんになったらもう一回。	1
藤島さんの絵を見たい。	1
同じ絵をもう一回見たい。	1

○行きたくない

主な記述	計
東京は遠いし、空気が悪い。美術館はおもしろかったが一度行くとあきる。	1
遠いから行ってみたいとは思わない。近かったら行く。	1

○その他

主な記述	計
行ってみたいけど、もっと色々な絵とかがあったら。	1
今度は違う絵を見てみたいので、またブリヂストン美術館に行ってもいいけど、他の美術館にも行ってみたい。	1

94%の子どもたちが「またブリヂストン美術館に行きたい」と回答しているのは、稿者たちにとってたいへんありがたい結果である。ブリヂストン美術館のコレクションがもっている魅力を、子どもたちは自分なりに把握している。あるいは美術館を楽しむことを知っているといえるだろう。

繰り返すが、子どもたちが前年に日本民芸館を訪問していることの大きな影響がうかがえる。美術館訪問を重ねることが、美術館利用の内実を高めているのではないだろうか。アンケートでは日本民芸館に関する記述を求めていなかったが、回答の端々に、2つの美術館を比較している眼差しが感じられた。子どもたちは両館の個性や特徴を十分に味わって記憶している。あるいは、この2つの美術館を訪問先に組み合わせるという同校のプログラムづくりが、成功しているともいえるだろう。都心の学校ではないために、簡単に美術館を訪れることはできない。十分な検討の結果選ばれたのが、この二つの美術館であることがうかがえる。

6. まとめ

この追跡調査は多くの分析対象をもたらしてくれる。現段階では稿者たちの能力では分析処理し切れていない。たとえば、男子児童M.S.のアンケート回答は興味深い。質問1については、「めんどくさかった。つまらなそうだった」と回答し、質問8には「遠いから行ってみたいとは思わない。近かったら行く」とネガティブに回答している。これは少数派である。ところが、質問2に対しては、実に全アンケート中、最多の8作品をあげているし、質問3では、モネ《黄昏、ヴェネツィア》(作者名、作品名は記憶していない)の画面をていねいに振り返り、質問4の回答からは、クレー《鳥》(作者名は記憶していない)に関するギャラリートークの内容をきちんと理解し記憶していることが分かる。質問7にも図工への取り組みが「変わった。明るい色、暗い色がたくさん使えるようになった」と記述している。これらを見ると豊かな美術館体験を得ているのは間違いない。こうした子どもたちの分析は非常にむずかしい。現段階でいえることは、子どもたちの体験は一人ひとり多様で、非常に繊細であるということだけだろうか。子どもたちを受け入れる稿者たちの責任の重さを実感した調査だった。

最後にあらためて、前述した3つの仮説が立証できたかについて考えておきたい。仮説1は、6か月後の追跡アンケートで十分に確認できた。6か月経ったのちも、美術館訪問の予定を聞いたときの感情から展示室で見た作品の細部、その日の夜に家族と交わした会話も生き生きと記憶されていた。もちろん訪問4日後の感想文ほどには、それらは鮮明ではなくなっている。しかし、次第に薄れていながらも永続する記憶となっていくはずである。日常的には意識の上ることなくなるだろうが、記憶の戸棚から必要なときにふいに飛び出てくるストックとなる。ふたたびブリヂストン美術館を訪れたとき、あるいは他の美術館を訪れたときに思い起こされるというだけではなく、市民生活を送る上でさまざまな局面でかけがえのない記憶遺産となるだろう。睡蓮の花を見たとき、心を動かされる風景に出会ったとき、あるいは自分自身を振り返ったとき、ふとブリヂストン美術館で見た作品のことが思い出されることになるはずである。

仮説2も、感想文の内容、また追跡アンケートの質問7の回答などによって、妥当なものと言い切れる。質問7では、子どもたちの図工での創作活動に美術館で見た作品が大きく影響を与えてい

ることが分かった。子どもたちは、目の前にある作品を見ることによって、それのもとになった創作の発想や主張したい主題があること、その発想や主題から作品完成に至るまでのプロセスや試行錯誤があることを感じ取る。それは、まさしく子ども自身の造形活動と、質や密度の違いこそあれ、同様のものであることを知っている。「まねしたい」という記述は、やろうとすればまねられる部分があるという意識があるからだろう。貪欲な学習意欲は、アンケートという気軽に記述できる課題だからこそ現れているものともいえるが、確かに子どもたちの心のなかに存在しているものである。

仮説3についても、アンケートの質問7への回答で確認できた。図工科教諭の日常の指導が美術館での作品鑑賞に大きな影響を与えていると断言できる。もちろん、この桐朋学園小学校は、クロード・モネ、とくに睡蓮の連作について十分な知識を事前に提供している。その影響は顕著であるが、ここではむしろ子どもたちが日常的に感じ取っている図工科教諭のメッセージを、美術館で反芻している可能性が高いことを指摘しておきたい。図工科の授業で繰り返しすり込まれるキーワードを、子どもたちは作品鑑賞で想起する。その想起は、6か月後も持続する。教室での授業から美術館での鑑賞への影響、そして美術館での鑑賞から教室での授業への影響、それらが相互に生じている。そこに、学校教育と美術館教育が連携する意義や価値が存在すると考えられるのである。

今後、稿者たちに課せられた課題は、こうした美術館体験をより多くの子どもたちに獲得させることである。ここまで本稿を読んでいただいた方は理解されていると思うが、桐朋学園小学校の子どもたちはさまざまな点で恵まれた環境にある。社会には恵まれない状況にある子どものほうが多いことを、いくつもの社会調査が示している。学校教育の現場の方々とのさまざまな形での連携が、少しでも社会の改善に向けて機能することを信じている。

付記：

桐朋学園小学校の関恵子教諭には、長年にわたり、多大なご協力、ご高配をたまわりました。ここに記して、厚く感謝申し上げます。